

# 大学への帰属意識が大学不適應に及ぼす影響（3）

—帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適應との関連—

中村 真\*・松田 英子\*\*・薊 理津子\*\*\*

## 要 約

中村・松田（2013, 2014）は大学生を対象とする一連の調査研究において、授業理解の困難さとともに大学への帰属意識の低さが大学不適應に影響する強力な要因であることを指摘している。それらは帰属意識を大学への愛着に絞って検討した結果であるが、中村・松田（2013）では帰属意識が、大学への同一視、ブランド志向、世間体などの因子から成ることも示されている。そこで、本研究では、一連の調査データを再分析し、大学への帰属意識を構成する因子を確認したうえで、これらの帰属意識の持ち方（強弱の組合せ）によって、大学生がどのようなタイプに分けられるのか、また、それらのタイプと大学不適應および大学満足との間にどのような関連があるのかを検討した。

その結果、大学への帰属意識によって調査対象者が7群に分類され、大学への帰属意識全般が高い群は、大学満足度と就学意欲がともに高く、大学不適應は低かった。一方、帰属意識全般が低い群、および、規範・世間体因子のみが高く他の帰属意識が低い偏向群は、大学満足度が低く、大学不適應は高い傾向を示した。

これらの結果をふまえて、大学への帰属意識の観点から大学不適應を予防するための方策について考察を行い、今後の研究の課題を述べた。

**キーワード：**大学生、大学への帰属意識、大学不適應、大学満足、就学意欲、クラスター分析

## 問題・目的

我が国における大学生の中途退学率は、大学全入時代の到来とともに増加傾向にあり、退学防止に向けた対策が急務となっている。退学率増加の背景には、近年の経済情勢の悪化にともなう学費捻出の困難さとともに、心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考えられる（中村・松田, 2013, 2014, 2015）。前者については、学期ごと（年度ごと）の学費納入時に問題が顕在化しやすく、これに対応すべく奨学金をはじめとするさまざまな経済支援が行われている。ただし、卒業後の返済困難者が増加傾向にあるなど奨学金に

も課題が見受けられるので、大学生の就学を十分に支えているとまでは言えないが、少なくとも目に見える形での具体的な対策が行われていると考えられる。一方、後者については、心理的要因による不適應は顕在化しにくく、問題が潜在化・深刻化しやすいという面に特徴があると言える。問題が発覚する頃には解決がより困難になっていることが多く、具体的な対策も立てにくいというのが実情であろう。したがって、大学生の退学防止対策を検討するうえで、大学不適應につながる心理的要因を明らかにすることは重要である。

筆者らは、一連の研究を通して、この問題に取り組んできたが、その先駆けとなったのが松井・中村・田中（2010）および中村・松井・田中（2011）の研究である。彼らは大学生を対象とする調査結果に基づいて、大学不適應に影響する要因が、友人関係の希薄さ、授業理解の困難さ、入学目的の曖昧さであることを指摘している。一方で、高木

2015年11月30日受付

\* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

\*\* 東洋大学 社会学部教授（江戸川大学 兼任講師）  
臨床心理学

\*\*\* 江戸川大学 人間心理学科講師 社会心理学

(2006) は、大学、アルバイト先、部活動といった組織への帰属意識が大学生の充実感に影響することを明らかにした。これは、帰属意識が大学不適応に対しても何らかの影響を持つ可能性を示唆するものである。

以上をふまえて、中村・松田 (2013, 2014) は、大学不適応に影響する要因が大学への帰属意識を媒介して、大学生生活の満足度を低め、大学不適応傾向を高めているのではないかと考え、これを多重回帰モデルにより探索的に検討した。その結果、大学不適応に直接的かつ最も強く影響するのは、授業理解の困難さ、および、大学への帰属意識（大学への愛着）の低さであった。入学目的の明確さおよび友人関係の良好さは、大学不適応に対して直接的には影響を及ぼさないか、影響するとしてもその程度は大きくはなかった。しかし、これらが大学への帰属意識を媒介して間接的に大学不適応の低さに影響する傾向が認められた。さらに、中村・松田 (2015) では、これらの心理的要因が直接または大学への帰属意識を介して間接的に大学不適応感を高める（低める）とともに、授業への出席率と GPA にも正負の影響を与えていることを示し、怠学や成績不振、牽いては、留年や退学を予測する有効な指標である可能性を裏付ける結果を得ている。

このように、一連の先行研究では、大学への帰属意識が大学不適応に対して抑止的に影響する可能性を示唆する知見が得られている。一方で、中村・松田 (2013) では、大学への帰属意識が、大学への同一視、ブランド志向、世間体などの要素から成ることも示されているが、一連の研究知見は帰属意識を大学への愛着に絞って検討した結果に基づくものであった。大学への帰属意識を構成する愛着以外の要素が大学不適応にどのような影響を与えるのかについては明らかにされていない。

そこで、本研究では、①一連の調査データを再分析し、大学への帰属意識を構成する要素（因子）を確認する。そのうえで、②これらの帰属意識の持ち方、すなわち、各因子の高低の組み合わせによって、大学生がどのようなタイプに分けられるのか、また、③帰属意識のタイプと大学不適応、

大学満足、および、就学意欲との間にどのような関連があるのかを明らかにする。これにより、大学生の大学満足度を高め、大学不適応を抑止するための方策を導くうえで有用な基礎的資料の提供を試みる。

## 方 法

### 調査協力者

首都圏にある 2 つの四年制大学の学生 596 名（男性 248 名、女性 326 名、平均年齢 19.29 歳、SD 1.17）を対象に質問紙調査を実施した。調査の時期は、A 大学（男性 121 名、女性 263 名）が 2013 年 6 月、B 大学（男性 109 名、女性 103 名）が 2014 年 1 月であった。調査対象者の性別と学年の内訳は、表 1 に示した通りである。

表 1 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
男性	106	73	46	5	230
女性	211	106	41	8	366
計	317	179	87	13	596

### 調査内容

調査は、①大学への帰属意識、②大学生生活の満足感・不適応に関する質問、③大学での友人関係、④入学目的の明確さ、⑤授業理解の困難さおよびフェース・シートで構成された。具体的な内容は次の通りであった。

①は、中村・松田 (2013) が、高木 (2003) の「組織コミットメント尺度」、越 (2007) の「所属集団に基づくアイデンティティの測定尺度」、本多・井上 (2005) の「学級集団帰属意識尺度」、野寺・中村 (2011) の「向大学態度尺度」を参考にして、これらの一部を引用または大学への帰属意識を測定するのに相応しい表現に改変し、新たな項目を加えて構成したものであり、「〇〇大学の学生であることを誇りに思う」など 25 項目（6 件法）から成る。

②は、中村・松田 (2013) が、松井・中村・田中 (2010) を参考に新たな項目を加えて構成したものである。大学不適応（「大学をやめようかと思ったことがある」など）、大学満足度（「大学生

活に満足している」など), 就学意欲(「大学で学ぶことによって, 自分の学力をさらに向上させたい」など)への回答を求める14項目(6件法)であった。

③④⑤は, 中村・松田(2013)が大学生活におけるさまざまな側面に関する意識を尋ねるために, 松井・中村・田中(2010)に新たな項目を加えて構成したものの一部である。③は, 大学生活における友人関係(「大学に仲の良い友人がいる」など)について尋ねる9項目(6件法), ④は入学目的の明確さ(「はっきりとした目的があって大学に入学した」など)を尋ねる3項目(6件法), ⑤は授業理解の困難さ(「授業の内容が難しいと思う」など)を尋ねる4項目(6件法)であった。

上述の通り, ①②③④⑤は, いずれも6件法で測定したが, 結果の集計・分析にあたっては, 「まったくあてはまらない」を1点, 「あてはまらない」を2点, 「あまりあてはまらない」を3点, 「ややあてはまる」を4点, 「あてはまる」を5点, 「よ

くあてはまる」を6点と, 得点化した。なお, ①の「〇〇大学」とは, 調査対象者が所属する大学を指す。なお, 本稿では①および②を分析の対象とした。

### 手続き

調査に先立ち, 回答は強制ではなく, 評価を伴わず, 個人情報の開示されないことを説明し同意を得たうえで, 講義時間中に集合調査を実施した。

## 結果

### 1. 大学への帰属意識の尺度構成

まず, 大学への帰属意識に関する25項目を用いて因子分析(重み付けのない最小2乗法, プロマックス回転)を行った。いずれの因子にも高い負荷量を示さない項目, および, 2つ以上の因子に対して高い負荷量を示す項目を除いたうえで, 固有値の推移, 因子の解釈の容易さを確認しながら

表2 大学への帰属意識に関する因子分析結果

項目	因子1 愛着	因子2 同一視・内在化	因子3 ブランド	因子4 規範・世間体
〇〇大学を気に入っている	.943	-.190	.022	.018
自分にとって, 〇〇大学は居心地がよくて, 落ち着くことができる	.913	-.075	-.074	-.036
〇〇大学は, 自分にとって大切な居場所である	.862	-.005	-.060	.001
〇〇大学が好きである	.842	.037	-.023	.014
私は, 〇〇大学に愛着がある	.638	.299	-.066	-.014
〇〇大学の学生であることを誇りに思う	.552	.157	.233	-.034
私は〇〇大学に受け入れられていると思う	.525	.107	-.022	-.019
〇〇大学の悪口を聞くと, 心中穏やかではいられない	-.114	1.034	-.097	.000
〇〇大学の良くない評判を聞くと, 嫌な気持ちになる	.001	.860	-.074	.060
私にとって, 〇〇大学の学生であることは重要なことだ	.246	.492	.123	-.071
〇〇大学にとって重要なことは私にとっても重要である	.223	.401	.170	-.008
私はいつも〇〇大学の学生であることを意識している	.260	.392	.023	.003
〇〇大学の学生であることは, 私の行動や考え方に強く影響している	.117	.336	.078	.108
〇〇大学は, 世間一般の評価が高いほうだと思う	-.090	-.047	.951	-.006
〇〇大学は就職に有利だと思う	.020	-.074	.871	.032
〇〇大学の学生であることが, 周囲の私への評価を高めてくれる	.179	.200	.452	-.017
もしも, 〇〇大学をやめたら, 家族や親せきに合わせる顔がない	-.007	-.045	.001	.914
もしも, 今, 〇〇大学をやめたら, 私は罪悪感を感じるだろう	.135	-.030	-.012	.734
もしも, 〇〇大学をやめたら, 世間体が悪いと思う	-.086	.176	.038	.521
私が〇〇大学に在籍しているのは, やめると失うものが大きいからである	-.098	.021	.001	.397
$\alpha$ 係数	.92	.85	.83	.73
因子寄与	8.56	2.13	1.21	1.13
因子間相関	因子1	.706	.668	.219
	因子2		.627	.251
	因子3			.171

重み付けのない最小2乗法, プロマックス回転

※ 項目の「〇〇大学」は, 回答者が所属する大学を指す。

ら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に4因子を抽出した(表2)。各因子は、因子負荷量が.300以上の項目群によって構成されているとみなして解釈を行った。第1因子は、「〇〇大学を気に入っている」、「私は、〇〇大学に愛着がある」など7項目が高い因子負荷量を示しており、「愛着」の因子とした。

第2因子は、「〇〇大学の良くない評判を聞くと、嫌な気持ちになる」、「私はいつも〇〇大学の学生であることを意識している」など6項目の負荷量が高くなっており、「同一視・内在化」の因子とした。

第3因子は、「〇〇大学は、世間一般の評価が高いほうだと思う」など3項目が高く負荷しているので、「ブランド」の因子とした。

第4因子は、「もしも、〇〇大学をやめたら、家族や親せきにあわせる顔がない」など4項目の負荷量が高いので、「規範・世間体」の因子とした。

尺度の信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、.73～.92と概ね高い値を示しており、それぞれに内的一貫性があると考え、以降の分析では因子ごとに合成得点(1項目あたりの平均点)を算出して用いた。

2. 大学満足, 大学不適応, 就学意欲の尺度構成  
次に、大学満足, 大学不適応, 就学意欲に関する14項目を用いて因子分析(重み付けのない最小2乗法, プロマックス回転)を行った。固有値の推移, 因子の解釈の容易さを確認しながら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に3因子を抽出するのが適当と判断した(表3)。ここでは、因子負荷量が、.400以上である項目群によって因子が構成されているとみなして各因子を解釈した。第1因子は、「大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい」、「大学で一生懸命学ぶことは、将来の仕事や人生に必ずプラスになると思う」など4項目の負荷量が高くなっているので、「就学意欲」の因子とした。

第2因子は、「大学生活に満足している」、「この大学に入って正解だったと思う」など5項目が高い因子負荷量を示しており、「大学満足」の因子とした。

第3因子は、「大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある」、「大学生活が辛いと感じることがある」など5項目が高く負荷しているので、「大学不適応」の因子とした。

尺度の信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、「就学意欲」が.84、「大学満足」が.80、「大学不適応」が.74

表3 大学満足, 大学不適応, 就学意欲に関する因子分析結果

項目	因子1 就学意欲	因子2 大学満足	因子3 大学不適応
大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい	.864	-.019	-.005
大学でさまざまなことを学んで知識や教養を増やしたい	.746	.062	-.049
大学で一生懸命学ぶことは、将来の仕事や人生に必ずプラスになると思う	.725	.112	.043
勉強していろいろなことを学ぶのは楽しい	.630	-.058	-.100
大学生活に満足している	-.063	.850	.009
この大学に入って正解だったと思う	-.034	.799	.026
大学にくるのが楽しい	.038	.633	-.122
大学の勉強に満足している	.114	.547	.097
この学科に入って正解だったと思う	.266	.438	.095
大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある	-.091	.169	.648
大学生活が辛い(つらい)と感じることがある	.097	-.205	.641
授業がある日なのに大学を休みたくなることがある	-.073	.093	.616
まだ授業があるのに、意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある	-.066	.036	.592
大学をやめようかと思ったことがある	.095	-.251	.463
$\alpha$ 係数	.84	.80	.74
因子寄与	4.67	1.94	1.61
因子間相関	因子1	.384	-.295
	因子2		-.484

重み付けのない最小2乗法, プロマックス回転

と高い値を示したので、十分な内的一貫性を有しているといえよう。したがって、以降の分析では、因子ごとに合成得点(1項目あたりの平均点)を算出して用いた。

### 3. 各変数の基本統計および変数間の相関関係

1~2で行った因子分析および信頼性分析をふまえて得点化した各変数の基本統計と性差の分析結果を表4に示す。その結果、大学への帰属意識における愛着因子、同一視・内在化因子で女子が高くなっている以外に顕著な性差は見られないので、以降は調査対象者全員を一括して分析を行った。

また、表5は、変数間の相関関係を示したものである。これを見ると、就学意欲と大学への帰属意識を構成する各因子との間には、いずれも有意な正の相関関係が見られた。また、大学満足についても大学への帰属意識の全ての因子との間に有意な正の相関関係が見られた。ただし、大学への帰属意識における規範・世間体因子と就学意欲および大学満足との間の相関係数は有意ではあるものの、いずれも.10未満の低い値であった。一方、大学不適応については、規範・世間体因子を除く大学への帰属意識に関する3つの因子との間に有意な負の相関関係が見られた。

全体として、大学への帰属意識を構成する各因子は、規範・世間体因子を除いて、就学意欲、大学満足、大学不適応(の低さ)とのあいだに比較的高い相関関係を示したが、特に、愛着因子において顕著であった。

### 4. 大学への帰属意識に基づく大学生の分類

大学への帰属意識を構成する4つの因子について調査対象者ごとに合成得点(1項目あたりの平均点)を算出し、これらを用いてグループ内平均連結法によるクラスター分析を行った。その結果、7つのクラスターを得た。第1クラスターから第7クラスターに含まれる対象者数は、それぞれ、35名、245名、13名、170名、28名、76名、14名であった。 $\chi^2$ 検定を行った結果、人数比率の偏りが有意であった( $\chi^2(6) = 588.58, p < .001$ )。

次に、得られた7つのクラスターを独立変数、大学への帰属意識を従属変数とする一元配置分散分析を4つの帰属意識ごとに行った。その結果、愛着因子( $F(6,574) = 160.10, p < .001$ )、同一視・内在化因子( $F(6,574) = 127.18, p < .001$ )、ブランド因子( $F(6,574) = 134.46, p < .001$ )、規範・世間体因子( $F(6,574) = 137.37, p < .001$ )のいずれも主効果が有意であり群間差が見られた。図1に7つのクラスターごとにみた帰属意識得点を示す。

表4 各変数の基本統計

	総平均 (SD)	男性 (SD)		女性 (SD)	t 値
愛着因子	3.60 (.93)	3.51 (.97)	<	3.67 (.88)	- 2.08*
同一視・内在化因子	3.15 (.91)	3.03 (1.01)	<	3.23 (.83)	- 2.50*
ブランド因子	3.01 (.94)	2.95 (.99)	=	3.04 (.90)	- 1.18
規範・世間体因子	4.02 (.99)	4.09 (1.09)	=	3.98 (.91)	1.28
就学意欲	4.57 (.78)	4.56 (.88)	=	4.58 (.69)	- .30
大学満足	3.99 (.86)	3.97 (.92)	=	4.02 (.81)	- .65
大学不適応	3.54 (.99)	3.47 (1.06)	=	3.58 (.95)	- 1.27

\* $p < .05$

表5 大学への帰属意識と就学意欲・大学満足・大学不適応の相関

	同一視・内在化因子	ブランド因子	規範・世間体因子	就学意欲	大学満足	大学不適応
愛着因子	.731***	.630***	.196***	.371***	.734***	- .372***
同一視・内在化因子		.612***	.249***	.279***	.456***	- .268***
ブランド因子			.169***	.142**	.416***	- .193***
規範・世間体因子				.098*	.083*	.001
就学意欲					.415***	- .275***
大学満足						- .399***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、**愛着因子**については、第1クラスターと第7クラスター、第3クラスターと第7クラスター、第4クラスターと第6クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第5クラスター>第2クラスター>第4クラスター>第6クラスター>第1クラスター>第7クラスター>第3クラスターであった。

**同一視・内在化因子**では、第1クラスターと第7クラスター、第3クラスターと第7クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった(第1クラスターと第7クラスターの平均値の差は10%水準で有意傾向あり)。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第5クラスター>第2クラスター>第4クラスター>第6クラスター>第1クラスター>第7クラスター>第3クラスターであった。

**ブランド因子**では、第1クラスターと第3クラスター、第1クラスターと第7クラスター、第4クラスターと第6クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった。各クラスターを平均値の高い順に並

べると、第5クラスター>第2クラスター>第6クラスター>第4クラスター>第1クラスター>第7クラスター>第3クラスターであった。

**規範・世間体因子**は、第4クラスターと第7クラスター、第5クラスターと第7クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった(第4クラスターと第7クラスターの平均値の差は10%水準で有意傾向あり)。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第7クラスター>第5クラスター>第4クラスター>第2クラスター>第1クラスター>第6クラスター>第3クラスターであった。

分散分析および多重比較によって得られた結果を総合的に概観して、各クラスターの特徴をまとめると以下の通りとなる。第1クラスターは、愛着因子、同一視・内在化因子、ブランド因子がともに低く、規範・世間体因子がやや高いので「規範・世間体偏向群」とした。第2クラスターは、4つの帰属意識がそろって高いので「全般高群」とした。第3クラスターは、4つの帰属意識がそろって低いので「全般低群」とした。第4クラスターは、規範・世間体因子が高く、他の3つの因子が中程度なので「中庸・規範高群」とした。第

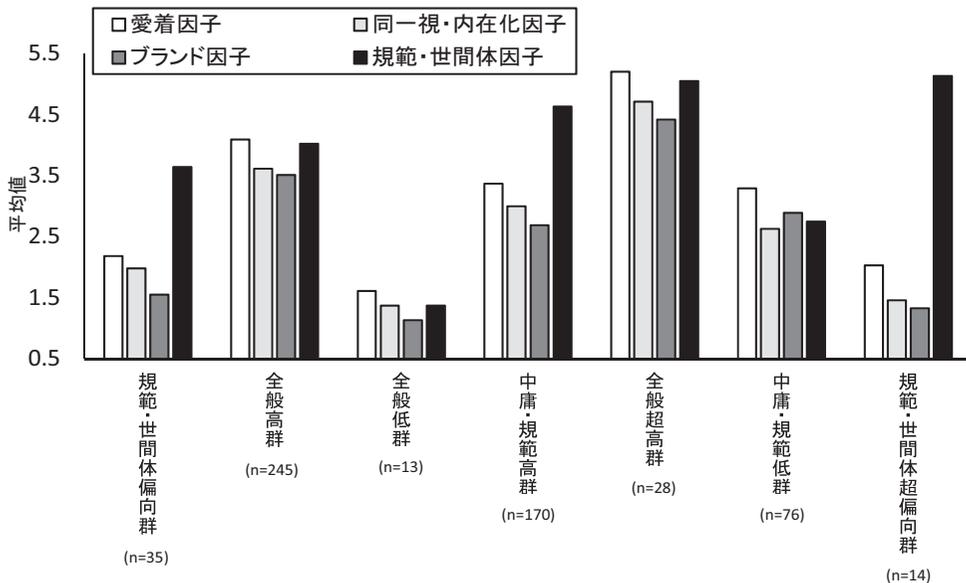


図1 クラスターごとにみた大学への帰属意識得点

5 クラスターは、4つの帰属意識がそろって非常に高いので「全般超高群」とした。第6クラスターは、規範・世間体因子が低く、他の3つの因子が中程度なので「中庸・規範低群」とした。第7クラスターは、規範・世間体因子が非常に高く、他の3つの因子が低いので「規範・世間体超偏向群」とした。

### 5. 大学への帰属意識のタイプごとにみた就学意欲、大学満足、大学不適応

大学への帰属意識に基づく7タイプによって、就学意欲、大学満足および大学不適応が異なるかを検討するために一元配置分散分析を行ったところ、ともに主効果が有意であった（就学意欲： $F(6,570)=7.78$ 、大学満足： $F(6,565)=36.37$ 、大学不適応： $F(6,565)=9.63$ 、いずれも  $p<.001$ ）。7つのタイプごとにみた就学意欲、大学満足、大学不適応の平均値を図2に示す。

Tukey のHSD法による多重比較を行ったところ、就学意欲については、「規範・世間体偏向群」と「全般高群」、「中庸・規範高群」、「全般超高群」、「規範・世間体超偏向群」との間にそれぞれ5%水準で平均値に有意差が見られた。また、「全般

高群」と「全般超高群」、「全般高群」と「中庸・規範低群」、「中庸・規範高群」と「全般超高群」、「全般超高群」と「中庸・規範低群」の間にも5%水準で有意差が見られた。各群を平均値の高い順に並べると、「全般超高群」>「全般高群」>「規範・世間体超偏向群」>「中庸・規範高群」>「全般低群」>「中庸・規範低群」>「規範・世間体偏向群」となった。

大学満足では、「規範・世間体偏向群」と「全般低群」、「規範・世間体偏向群」と「規範・世間体超偏向群」、「全般低群」と「規範・世間体超偏向群」、「中庸・規範高群」と「中庸・規範低群」の組み合わせを除く全ての群間の平均値の差が5%水準で有意であった。各群を平均値の高い順に並べると、「全般超高群」>「全般高群」>「中庸・規範低群」>「中庸・規範高群」>「規範・世間体偏向群」>「規範・世間体超偏向群」>「全般低群」であった。

大学不適応については、「規範・世間体偏向群」と「全般高群」、「全般超高群」との間にそれぞれ5%水準で平均値に有意差が見られた。また、「全般高群」と「全般低群」、「中庸・規範高群」、「中庸・規範低群」、「規範・世間体超偏向群」との間

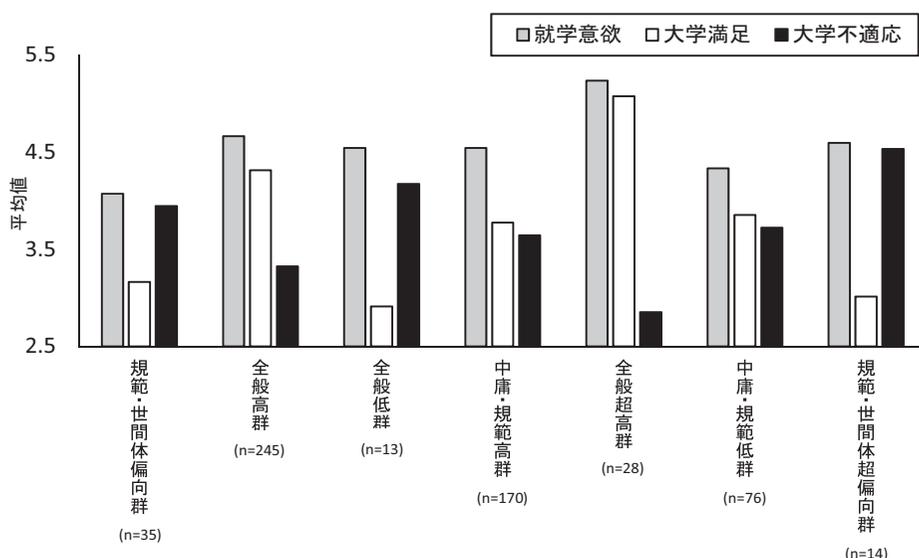


図2 大学への帰属意識のタイプごとにみた就学意欲・大学満足・大学不適応

に5%水準で有意差が見られた。さらに、「全般低群」と「全般超高群」,「中庸・規範高群」と「全般超高群」,「中庸・規範高群」と「規範・世間体超偏向群」,「全般超高群」と「中庸・規範低群」,「全般超高群」と「規範・世間体超偏向群」の間にも5%水準で有意差が見られた。各群を平均値の高い順に並べると、「規範・世間体超偏向群」>「全般低群」>「規範・世間体偏向群」>「中庸・規範低群」>「中庸・規範高群」>「全般高群」>「全般超高群」となった。

これらの結果をまとめると、大学への帰属意識全般が高い群は、大学満足度と就学意欲がともに高く、大学不適応は低くなっている。一方、帰属意識全般が低い群、および、規範・世間体因子のみが高く他の帰属意識が低い偏向群は、大学満足度が低く、大学不適応は高い結果を示した。

## 考 察

本研究の目的は、第一に、中村・松田（2013）によって示された大学への帰属意識を構成する因子を再確認することであった。帰属意識に関する25項目を用いて因子分析を行った結果、「愛着」「同一視・内在化」「ブランド」「規範・世間体」の4因子を抽出した。これは、中村・松田（2013）を踏襲するものであり、大学生は、自らを受け入れてくれる居心地の良い場として大学に親しみや好意を持ち（愛着）、自己概念や自己評価の準拠枠として大学を自己の環境内に位置づけ（同一視・内在化）、世間一般から大学に向けられる評価に基づいて自尊心を維持・高揚させ（ブランド）、家族や親せきからの支持や期待に対する責務として大学への在籍を維持する（規範・世間体）という4つの側面で大学に結びついていると考えられる。

目的の二点目は、大学への帰属意識の持ち方によって大学生がどのようなタイプに分けられるのかを検討することであった。先に述べた通り、大学への帰属意識は4つの因子で構成されていることが再確認されたが、それぞれの因子の高さは個人によって異なると考えられる。そこで、帰属意

識を構成する各因子の高低の組み合わせによって大学生を群分けするために、クラスター分析を行った結果、7群を得た。4つの帰属意識がそろって高い「全般高群」には最も多くの調査対象者（245名、42.0%）が含まれていた。次いで、規範・世間体因子が高く、他の3つの因子は中程度である「中庸・規範高群」（170人、29.1%）、規範・世間体因子が低く、他の3つの因子は中程度である「中庸・規範低群」（76人、13.0%）に比較的多くの対象者が含まれた。規範・世間体因子がやや高く、他の3つの因子が低い「規範・世間体偏向群」は35人（6.0%）、4つの帰属意識がそろって非常に高い「全般超高群」は28人（4.8%）、規範・世間体因子が非常に高く、他の3つの因子が低い「規範・世間体超偏向群」は14人（2.4%）、4つの帰属意識がそろって低い「全般低群」は13人（2.2%）であった。以上の通り、4つの帰属意識がすべて高い学生、または、規範・世間体因子以外の3つの因子が中程度である学生が全体の約89%を占めている。そして、4つの帰属意識がすべて低い学生、または、規範・世間体因子のみが高く、他の3つの帰属意識は低い学生が約11%を占めている。

目的の三点目は、大学への帰属意識に基づく学生のタイプと大学適応、大学満足、および就学意欲との間にどのような関連があるのかを明らかにすることであった。図2に示した通り、大学への帰属意識全般が高い群は大学満足度および就学意欲が高く、大学不適応は低くなっている。その一方で、帰属意識全般が低い群および規範・世間体因子のみが高く他の帰属意識が低い偏向群においては、大学満足度が低く、大学不適応は高くなっている。したがって、大学への帰属意識は全般に大学適応を促進し、大学不適応を抑制する要因であることが示唆されるが、愛着や所属意識をとまわずに社会規範や世間体のみで大学に結びついている群は不適応的な兆候を示している可能性がうかがわれる。大学への帰属意識の観点から学生の大学適応を促進し、不適応の抑止策を講じるためには、大学を、学生にとって居心地がよく、自分が受け入れられていると実感できるような親し

みのある場として、また、自己評価や価値判断の準拠枠として、そして、誇りをもって自らを成長へと向かわせる動機づけ要因として機能するように、環境整備を図っていく必要がある。

また、家族・親せき等からの期待に対する責任や義務感も学生を大学に結びつける要因ではあるが、愛着や所属意識をとまわずに規範・世間体のみで大学に在籍している状態は、かえって不適應を増長させる可能性が高いという知見も得られた。すなわち、本研究の調査対象学生のうち、帰属意識全般が低い群および規範・世間体因子のみ高い群が、全体の約1割を占めており、彼らが大学不適應またはその予備軍である可能性を示唆する結果が示されたが、大学不適應への対策として、そのような兆候を示す学生を問題が顕在化・深刻化してからではなく、できるだけ早期に把握し、支援していくことが急務である。

この問題を大学への帰属意識を高めるための具体的な支援策の構築を含めて継続して検討する必要があると言える。

#### 参考文献

- 本多公子・井上祥治 2005 高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み 岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻 109-117.
- 越 良子 2007 中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響 上越教育大学研究紀要 第26巻 357-365.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕 2010 大学生の大学適應に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻第1号 121-133.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕 2011 大学生の大学適應に関する研究Ⅱ -入学目的、授業理解、友人関係でみた対象者のタイプと大学不適應との関連- 川村学園女子大学研究紀要 第22巻第1号 85-94.
- 中村 真・松田英子 2013 大学生の学校適應に影響する要因の検討 -大学不適應、大学満足、就学意欲に着目して- 江戸川大学紀要 第23号 151-160.
- 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適應に及ぼす影響 -帰属意識の媒介効果における性差および適應感を高める友人関係機能- 江戸川大学紀要 第24号 13-19.
- 中村 真・松田英子 2015 大学への帰属意識が大学不適應に及ぼす影響(2) -出席率、GPAを用いた分析- 江戸川大学紀要 第25号 135-144.
- 野寺 綾・中村信次 2011 向大学態度尺度開發の試み 日本福祉大学子ども発達学論集 第3号 71-80.
- 高木浩人 2006 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号 61-67.